

2025年4月の議事録

日時	2025年4月24日 19:30~20:30
場所	芦屋浜 センタービル3F 会議室
参加者	中村(アステム D 棟)、友田・宮城(アステム C 棟)、小黒(浜風町1街区)、本田(浜風町第 4 住宅)、松尾・土井(浜風第 5 住宅)、末友(新浜町住宅)、三浦(ラ・ヴェール芦屋Ⅱ)、大北・松本(ラ・ヴェール芦屋Ⅲ)、山口(アステム A・B 棟)、藤井(芦屋浜第2住宅)、深谷(緑第二住宅)、大田(潮見南)、奥野(潮見第二住宅)、春木(南浜 1 街区)、寺前・川島(市議) 合計20名
議題	1. マナー違反のごみ投棄によるパイプライン報告 2. 2. パイプラインに捨てることのできるごみとは？ 3. 3月のワーキング・グループの報告 4. 3年間のパイプライン運転改善による電気量削減の状況報告 5. その他

1. マナー違反のごみ投棄によるパイプライン報告

近年、パイプラインへの不適切なごみの投棄が急増しており、これが深刻な詰まりや設備破損、収集費用の増大を引き起こしています。特に、2024年2月以降、特定の場所で同様の詰まりが何度も発生しており、繰り返しの臨時収集対応を余儀なくされています。臨時収集には1日あたり約4.5万円がかかり、10日続くと45万円、さらに高圧洗浄を複数回行う必要もあるため、年間で100万円以上のコストが発生しています。

原因となっているのは、布団、毛布、新聞紙、教科書、雑誌、リチウムイオン電池を含む家電製品(ヘアドライヤー、ビデオテープなど)、包丁など、パイプラインで処理できない大きさ・性質のごみです。これらがスクルーに引っかかったり、パイプ内で膨張・破損・火災を引き起こすことで、深刻なトラブルに発展しています。実際、これまでに収集車5台がリチウム電池による発火で焼損しており、うち1台は修理不能でした。

加えて、パイプ内に作業員が入って詰まりの除去を行うという危険な作業が過去には行われたこともあり、人身事故に繋がるリスクもあります。現在はそのような手作業は中止されていますが、詰まりの発生がいかに重大な問題であるかが強調されました。

これを受けて、行政ではチラシやポスターの作成・掲示、現物展示(スキーウェアなど実際に捨てられたもの)による啓発活動を実施しています。

2. パイプラインに捨てることのできるごみとは？

パイプラインに投入可能なごみについて、改めて基本ルールと具体例の説明がありました。主なポイントは以下の通りです：

- 燃やせるごみであること
- 大きさが 30cm 未満であること
- 芦屋市指定のごみ袋を使用すること

投入可能なごみとしては、生ごみ（よく水分を切る）、紙くず、切った布、プラスチック、草木の小片、革手袋、ビニール類などが挙げられました。一方、新聞紙や雑誌、段ボール、教科書、衣類、カーペット、布団などは詰まりの原因となり投入不可です。硬質なもの（木材、鉄製品、包丁、レンガなど）はパイプの破損に繋がるため、絶対に入れてはいけません。

また、パイプラインが詰まった際に臨時設置されるコンテナにも、通常のごみ袋ではなく、指定袋を使用するよう指導がありました。指定袋を使わないことで分別が困難になり、収集作業が妨げられるためです。

今後は全国的にもごみ袋の価格を引き上げて抑制を図る動きがあり、北海道ではすでに 1 枚 150 円と高額化しています。芦屋市でも現在は原価で提供されていますが、今後の制度変更の可能性もあります。

加えて、市役所では廃食用油（天ぷら油など）の回収を開始しました。これは飛行機燃料（SAF：持続可能な航空燃料）として再利用されるもので、現在は市役所での回収のみですが、今後は回収拠点を市内各所に設ける計画があります。

3. 3月のワーキング・グループの報告

3月のワーキング・グループでは、市の人事異動報告を含め、今後の改善方針について議論が行われました。市民生活部長には新たに和泉氏が就任し、パイプラインを管轄する環境施設課の担当者も交代となりました。これにより、これまで対応が不十分だった課題への改善が期待されています。

また、議論が停滞しやすいという問題を解決するため、ワーキング・グループにファシリテーターを導入することが決定しました。7月25日を目処に契約し、8月から実際に議論に加わる予定です。予算は220万円が計上されています。

さらに、パイプラインの代替案検討として、浜風町のタウンハウス地区を対象に、具体的なごみ収集拠点の設置の課題が提示されました。例えば投入口3021は道路に面しており利便性が高いものの、設置スペースが限られているため、ゴミカート（700L）2台の設置が必要とされています。その他の投入口は道路からの距離が50m以上あるため、収集の利便性に課題があります。

実際の収集容器については、カート型（収集時に一括で積み込める）と、ステンレス製のごみボックス型（中身確認が可能）のどちらが適切か検討中です。安全性と収集効率、火災リスクを天秤にかけながら、住民との合意形成を進めていく方針です。

4. 3年間のパイプライン運転改善による電気量削減の状況報告

ここ3年間で行われた運転方法の見直しにより、パイプライン全体で使用する電力量やCO₂排出量の削減に成功しています。運転ルールの変更として、朝5時にすべての投入口から収集を行う方式を導入し、特に月曜日については、週末の影響を受けた午後3時以降のゴミ溢れ対策として収集を強化しました。

この結果、電力消費は14%減、CO₂も同程度削減され、年間約130万円のコスト削減が実現されました。しかし、パイプラインの詰まりにより発生する高圧洗浄後の乾燥作業が電力消費の増加を招き、思った以上の削減が実現できなかった面もあります。

また、ブロワー(吸引装置)を1台のみ運転することで、契約電力を半減させる試みも検討されていますが、それにより収集時間が長くなり、市民の不便が増す懸念もあります。運用上の効率と市民サービスの両立という課題が今後の焦点となります。

5. その他

会議では、私たちの利用者の会が行っている啓発活動についても紹介されました。このホームページでは、毎朝6時にパイプラインの運転状況を更新し、○・△・×で稼働状況を可視化しています。また、詰まりが発生した現場には注意喚起のポスターを掲示し、住民への周知に努めています。

さらに、チラシのポスト投函、掲示板への貼付、年次報告書への記載など、さまざまな媒体を通じて情報提供が行われており、特に若葉町や高浜町では全戸配布のチラシを予定しています。

また、パイプラインの運用には年間2億2300万円の税金が使われており、この予算の妥当性に対して今後議論の可能性がります。

代替案の実証実験については、戸建て・タウンハウス・中層・高層住宅ごとに3か所ずつ、最大12か所で行われる予定で、今年度中にモデル案を決定し、来年度には住民の応募に基づいて設置を開始する計画です。これにより、パイプラインによるトラブルや無駄なコストを削減する新たなシステムの構築が期待されています。

なお、今後は「便利さ」の時代から「持続可能性」重視の時代へと移行していくことを念頭に、市民と行政が協力しながら、より効果的な廃棄物管理の仕組みを模索していく必要があることが強調されました。

以上